



研究

臺灣の昔話 (承前)

町田 則文

第三 動物に關する談話

- 一、猿蟹合戦の話。
- 二、非望を抱ける鰻魚、烏に攫まれて上天し忽ち放下せられて死せし話。
- 三、虎あり、人の形に變じ人を謀殺せんとして、反て人に謀殺せられし話。
- 四、猫と虎と争ひ、猫は犬を仲裁とせしが、後、虎は犬を殺せしも、猫は獨り免かれ、他の犬の怨を受けし話。
- 五、水牛と虎と闘ひし話。
- 六、水牛あり、身を支那に置き頭を伸ばして、臺灣に至りて、草を

食ひし話。

- 七、三足の鷄ありし話。
- 八、三目の猪ありし話。
- 九、鷄は鴨を諷めて死せしといふ話。
- 十、大稻埕に一牝豚あり、兩頭の豚を生みし話。
- 十一、鼠の猫を捉へて竹桿に上りし話。
- 十二、蛇の田哈を咬みし話。
- 十三、牡猫の子を生みし話。
- 十四、鷄は鴨と戦ひし話。
- 十五、鱧の蛇を食ひし話。
- 十六、鳩山に入りて、米を食し、歸來の後、尋ねれども何物も無かりしと云ふ話。
- 十七、蟾螂蟬を食はんとして、後に雀の窺ふを知らず、蟾螂を食はんとして、後に人の之を取らんとするを知らずといふ話。
- 十八、鳥虫を食はんとして、後に猫の窺ふを知らず、猫鳥を食はんとして、後に大鴉の窺ふを知らず、會々狂犬相咬むあり、驚きて皆四散せりと云ふ話。
- 十九、猫と鼠と遊びし話。
- 二十、虫に鷄に啄まれ、鷄は鷄に拿へられ、鷄は犬に咬まれ、犬は水に陥りて死せりといふ話。

二十一、地下に大牛ありとの話。

二十二、臺灣の拳頭武山の中間に一寺あり、左右の兩樹に、鷺と鳥と巢を結び相争ひ、後附近の農民之を和約せしと云ふ話。

二十三、犬人を生みし話。

右は概して愛笑的の事實なれども中に教訓的の意味を含むものなきにあらざ、乃ち之によりて、分類せば、

(イ) 教訓的の意味を含める話

(ロ) 愛笑的の意味を含める話

なりとす、中に就き水牛の身を支那に置き、頭を伸ばして臺灣に來り、草を食ひしといふは、支那本土と臺灣との、接近する觀念を表示する者といふを得べきか、又拳頭武山に於ける鷺鳥争闘の事は、臺灣の或歴史より、轉成せる關係あるやを認む、よりて該談話の全文歴史の概要とを左に比較掲記せん。

(談話)、本島の拳頭武山の中間に一寺あり、左右の兩樹は均しく皆鳥巢なり、其鳥は二様にして、一を白鷺鷥とし、一を烏鴉鳥とい

ふ、毎年二鳥は巢を争ひ各々其羽翼を會し、兩隊相打ち死亡殆ど盡きんとし其羽毛山野に遍れし、後來附近の農民爲めに和約して争ひ止めり。

(歴史)、宜蘭西南の大山脈に拳頭母山といふあり、此山邊より直行せる一線の山中、灣頭南灣と稱せらるる兩蕃族の中間にして、其左右には、乃ち幾多の蕃社あり、嘗て此兩蕃は闘殺を繼にして、永く和せざりしが、土人陳輝煌といふもの、酒を山内に設け兩社の頭目を召し同く飲みて和睦を爲さしむ。

中に就き鼠の猫を捉へて竹桿に上りし話、蛇の田蛤を咬みし話、鷄と鴨と戦ひし話、は二人同伴なれば、最人口に喰灸するものなるべく、是亦其原由を知らんと欲する所なり。

而して之によりて、凡臺灣人の普通知識が動物の上

- 有脊動物には
 猿、鳥、虎、猪、鱗、犬、鷄、水牛、豚、鵝、鴨、鼠、馬、
 鰻、蛇、鳩、蜜、蠶、牛、
 無脊動物には

女子に就きての所感

南越 雪 堂 生

古代は、女子に學問をなさしむること少なりし故、無智の者多くありたり。されど近來に至り、盛に女子の教育を勧められ、女子も男子と同じく學問することを得ることなれり。是れ偏に明治聖代の恩恵とこそ謂ふべけれ。然るに今日の女子の學問は、兎角根本的の學問、則ち心を治め、身を修むることなごに力を用ふるもの少くして、唯枝葉的の學問、即ち詩歌、文章、音曲、茶の湯、生花なごにのみ、力を用ふるもの多き傾あり。故に當時の女子は、概して、奢侈に流れ、外貌を飾り、氣分のみ高く、髪は洋風を真似び、身には黒紋付の長羽織を翻へし、我こそ女丈夫なれと揚々然

研究 女子に就きての所感

として耻ぢざるものあり、誠に見苦しきことの限りにこそあれ。

余嘗て聞きしことあり、或る豪家に一人の娘あり。或日、主人按摩に身體を揉ませつゝ、言へる様、我娘は、幼き時より琴三味線はいふに及ばず、其他の技藝も、一通り習はせ、その上學問も少々は出来る様になりたるが、最早年頃に及びたれば、相應の家に縁付かせたし云々と、述べければ、按摩は、いと感心しげに口を開き、おひねりも出来ますかと尋ねれば、主人は尖り口上にて、憚りながら、此家にては、按摩の稽古は不用なりと答へたり。此時按摩は、冷笑して、語をつぎ、如何なる豪家の嫁にても、舅姑なごに、病み煩ひのありたる時は、背腹を撫で充分に看護すべきが、女の道には非ずやと言へば、主人もこれには閉口したりきといふ。